

第一章 一九八八年〜一九九一年 アジアのビール

一九八八年九月、わたしは建設省（当時）から、国際協力事業団（JICA）を通じて、国連の末端機関であるESCAP/WMO台風委員会事務局（在マニラ）に派遣された。

台風委員会事務局のわたしの仕事は、台風被害軽減を目的として作られた委員会の企画運営と、委員会メンバーへの洪水対策に関する技術協力だった。メンバーは、毎年のように台風被害を受ける東アジアの国々である。

赴任期間二年八ヶ月の間、わたしはマニラのオフィスで仕事をし、その上一二〇日間の海外出張があった。女房と子供達をマニラに残して出張することは不安であり、わたし自身はアジアの諸国を巡って疲労困憊した。でも、そういったグチをこぼしても誰も聞いてくれそうにないので、楽しかった部分だけでも知って欲しいと、このような駄文を書き残すことにしていた。

一 フィリピンどこでもサンミゲル

（ラ・ウニオンのキラウイン）

フィリピン、ルソン島の北部、ラ・ウニオンの田舎町に作られたマリアーノ・

マルコス記念大学のゲストハウスには贅沢にもテラスがあり、夜空の星を見ながら

サンミゲルを飲むことができる。フィリピンでは、そこらじゅうでサンミゲルビール三百二十ミリリットルの可愛い瓶を見かける。その味は苦みの効いたピルスナー系で、日本人にも親しみ



やすい。

大学の助手二人と青年海外協力隊の日本人が、ゲストハウスのテラスで、マニラから来たわたしをねぎらいサンミゲルで歓待してくれた。蝙蝠が飛び交う下で楽しく飲みながら、わたしは何でこんな所にいるんだっけ、と思い返していた。

その三日ほど前に、JICAマニラ事務所から土砂災害に関する仕事の依頼があり、十分な準備もなしにとりあえず駆けつけることになった。当時JICA専門家としてマニラに滞在していたわたしは、断るわけにはいかなかった。

マリアーノ・マルコスとは、マルコス元大統領の父親で、彼を記念して建てた大学が土石流に襲われてしまったのだ。大学の建物は日本の無償協力で完成し、フィリピン政府に引き渡した直後だったので、JICAとしては対応に苦慮したようだ。そこで専門家による調査と対策案の提案で、お茶を濁すことにしたらしい。

午後には大学に着き、わたしは大学総長をはじめ関係者の話を聞いた後に、被害状況の現地調査を行った。そして、翌日に実施する上流部の調査の打ち合わせをして、やっと泥だらけの体をシャワーで洗い流した。あとは翌日のことは忘れてサンミゲルを飲むだけだ。

ゲストハウスのテラスに来てくれた大学の助手二人は、とても気が持が良い連中だった。日本から青年海外協力隊として派遣され、大学で働いている若者も、明るく前向きな豪傑である。



1990年 ラ・ウニオンの土砂災害跡地

三人が持つてきてくれたビールのつまみは、ビニール袋入りの、唐辛子と酢の効いた赤い肉のタキだった。フィリピンでは酢と唐辛子で味付けした魚や肉のタタキを「キラウィン」と呼び、地域によつていろいろな種類がある。その酸っぱさと辛さはビールにピッタリで、サンミゲルが売れ続けているのはそのおかげかもしれない。

ところで、このキラウィンの材料の赤い肉は何か？と聞くと、なんと「犬」との答えが返つてきた。酢でバイ菌を殺してあるから心配はない、この地方では、大事な客人を迎えると、自分の犬を潰して食わせるんだ、と三人とも笑顔で答える。ふむ、こうなったらアルコール消毒だなど、なおさらビールがはかどつてしまった。

翌日、わたしは心配していた腹痛もなく快調だったが、犬肉のキラウィンに慣れているはずの協力の隊の豪傑は、脂汗を流しながら遅刻してきた。わたしの胃袋も捨てたもんじゃないと凶に乗っていたが、トイレに走る彼の姿を見てぞつとした。人ごとではない。犬肉に崇られて任務を全うできなければ、ましてや命に関われれば、それこそ犬死にだ。結局、彼は腹を押さえながらも率先して溪流をよじ登り、調査を無事に終えることができた。

〈マニラのシング〉

フィリピンで一番おいしい料理は？と聞かれると、わたしは迷わず「シング」と答える。それも、フィリピン大学の近くのトレリス (Treliss) で食べたシングが絶品だった。トレリスは、草で葺いたような屋根によし張りといった風情のレストランで、いつ行つても混んでいる。もとはといえば、英語を習っていたフィリピン大学の女性教授に教えてもらったレストランだ。

女性教授と一緒に昼食に入ったトレリスで、彼女はわたしの好みも聞かず、シシグとイカの炒めもの、そしてサンミゲルを注文した。ステーキによく使われる鉄の皿でジュージューいつて出てきたシシグは、暑苦しい昼間にもかかわらず食欲をそそり、サンミゲルも進んでしまう。

シシグは、豚の耳を細切りにして玉葱と和え、魚醤とニンニクで味付けをした料理である。コリコリとした歯ざわり、ジュージューという音、ニンニクの香ばしい匂いと味、そして見た目の大胆さによだれが出てくる。わたしは午後の仕事も、彼女に真つ赤に直された英語のレポートのことも忘れ、シシグの冷めぬうちに、ビールが温くならないうちにと、汗を流しながら急いで食べた。

シシグはマニラの北側に広がるパンパンガ地方の名物で、パンパンガは、フィリピンで最も美味しい料理が楽しめる地方として有名な。女性教授は、フィリピンでは素材を大事に使って料理し、例えば豚の耳も捨てないで、このような美味しい料理にするんだ、と誇らしげに語った。きっと、食べ物として死んでいく豚に対しても、感謝の意を表してお祈りを捧げたりするのかな？日本でも「豚の耳に念仏？」というように。

〈スモークーマウンテンのサンミゲル〉

東南アジア最大のスラムと呼ばれたスモークーマウンテンは、再開発が進みすでに跡形もないらしい。これは、マニラの北側に位置するごみ捨て場の俗称で、四〇メートル以上に積み上げられたごみの山が自然発火していつも燻っていたので、そう呼ばれた。一九五四年から一九九〇年まで、ごみ捨て場として利用され、一日約六五〇トンのごみがダンプで運び上げられていた。

スモークーマウンテン一帯には、二万五千人もの貧しい人々が住みつき、一つの町を形成してい



1990年 フィリピン スモーキーマウンテン

た。彼らのごみの中から再利用できるものを選び出し、それを売って生計を立てていた。山の上には教会を中心に飲食店、雑貨商が建ち並び、さらに廃品利用の住居が所狭しと軒を連ねていた。

一九九〇年、JICA専門家の仲間数人でこの区域を視察することになり、地域の顔役に立ち入り許可と安全の確保を頼み込んだ。この一帯は現地の人もあまり近寄りたがらない場所で、ましてやカメラを首から下げた日本人一行が勝手に立ち入ると、安全は保証できないと言われていた。

わたしたちは市の担当者にガードされながら山に入ったものの、嘔吐感を催す悪臭と煙、ごみから舞い上がる埃に圧倒されてしまった。そこに住む人々はダンブが着く度に群がり、鉤状の道具を使ってごみを選び分けている。それが彼らの生活なのだ。

一緒に行った専門家の一人が尿意を覚え、勇敢にも廃品再利用の家に使所を借りに入った。しばらくして、顔をこわばらせて出てきた彼に聞くと、使所を使わせてもらった上に、サンミゲルまでご馳走になったという。黒ずんだベニヤでできた壁に沿って進み、教えられたとおり川の上に張り出した板の上から用を足したらしい。合理的な使所だと感心して戻ろうとすると、「まあ一杯飲め、日本人」と濁ったガラスの器に入ったサンミゲルを注いでくれた。

こりや、飲まないわけにもいかないと、氷と一緒に油も浮いていそうな一杯を一气飲みにしてきたという。わたしたちは、口元を苦そうに歪めている彼に、ビールはビン詰めを買ってきたはずだ、水より安全だ、などと慰めの声をかけ、勇氣ある行動に敬意を表した。

山では、相変わらず金属、空きビン、プラスチック、ビニール袋、段ボール、紙類を選び出し分別していた。その横では、健康そうな裸の幼児達が走り回って遊んでいる。

彼らを見てみると、濁った器のビールにビビってしまふわたしたちの方が異常なのかもしれないと思えてきた。わたしたちは、衛生状態をしきりに気にしながら隔離されたような生活を送り、多くのごみを出している。例えば、毎日捨てている不要になった紙だつて、彼らにしてみれば重要な資源だ。「捨てる紙あれば、拾う紙あり？」などと戯れごとを言っている場合ではない。

〈フィリピン巡りで一段落〉

ここで念押ししておきたいのだが、わたしは、フィリピンの人々、彼らの生活を笑い飛ばすつもりは毛頭ない。かえつて教えられたもののほうが多かつたと感謝している。こうした駄文を書き続けるのも、いろいろな人々のいろいろな生活を紹介したいからだと思う。

こうした経験を経て日本に帰ってきたので、いまだに人生観、価値観の混乱を抱えている。日本人に戻りきれず、それでいて日本の安全で豊かな生活を楽しんでいる。何か中途半端で、帯に短し襷に長し、命短し恋せよ乙女？